

## 解 答

一

問1 ウ 問2 〔恭一が〕本心ではなく言った〔ことば。〕

問3 a 工 b ア c ア 問4 イ

問5 子供を捨てること。 問6 工

問7 自分がみなしごになってしまったことを認めたくないから。

問8 1 着くのがおくれた 2 恭一の世話をする

二

問1 a 科 [す] b 仕組 [み] c 農耕 d 典型

問2 A 社会 B 実力 問3 社会の成員

問4 ゲームの前提としていくつかのことを認め合う必要があること。

問5 イ 問6 支配階級 強い者 被支配階級 弱い者 問7 工

問8 一番強い者が、すべてのルールを決め、全員がそれに従う。

三

問1 a 物色 b 所属 問2 A 力 B ウ C ア D 工

問3 X ア Y 力 問4 工 問5 イ

問6 〔家族が〕時間を共に過ごせていないこと。

問7 工 問8 ア 問9 ウ

## 解 説

一

問1 「爆弾」とはそれが「恐ろしいもの」であることを暗示する比喩表現です。「ボストンバック」は、一般に旅行などに持っていくものですから、それを父が持っているということは、つまり、ここでは父がどこか遠くに行ってしまう（ぼくは捨てられてしまう）ということを意味しているのです。

問2 「せりふ」というものは「演じる」時に言う言葉です。この後に「おぞましいせりふを～わびた」とあることからも、この言葉の内容が、恭一の本心からはほど遠いということがわかります。父の気を引くために、父にとどまつてもらうために、無理矢理口にした言葉だと考えられます。

問4 恭一の言葉「あのおねえさん、どこかで待ってるの？」は、図星だったのでしょう。実際父はこの後戻って来ません。子供嫌いの女性とともに、二人でどこかに行く約束をしていたのかもしれません。息子に見つかれてまず「ギョッ」とし、それから自分のしようとしていることの罪を意識して、辛い思いにさいなまれている（「かなしい色に変わった」）のだと読み取れます。

問5 先ほどから何度も述べている、「父」が今からしようとしていること、恭一が止めたいことを答えます。

問6 これは違いが微妙である分、ちょっと難度が感じられる設問ですね。「うまいことが悲しい」という点がポイントです。今、自分は父に置き去りにされようとしている、そんな大変な状況ですから、本当はすしを味わうどころではないはずなのに、現実にはすしを「ほおのとろけるよう」にうまい、と感じてしまっているわけです。体が心から離れて反応している悲しさを述べています。

問7 2ページの終わりから3ページの初めに着目しましょう。父が戻らなければ、自分はみなしごになってしまう…。せっぱ詰まった思いが、父の戻る可能性を感じているわけでもないのに、恭一を待たせます。

問8 恭一は、おばを二時間も待たせたことに対して謝罪しています。待たせたのは間違なく恭一自身なので、その意図におばが答えたなら、今の返事の仕方はおかしいですね。おばは、恭一ではなく、父に責任があることについて答えています。つまり、ここで言う「あやまるべきこと」は「恭一の世話をおしつけたこと」を指すのです。子供に選択権があるわけではないので、「恭一に非はない」と、恭一をかばうとともに、恭一の父を暗に非難しています。

二

問2 A 冒頭に「王候が～何でしょうか。」とあるように、この文章は「社会」について考察している文章です。そしてこの段落では、社会のあり方を「ゲーム」にたとえて説明しています。B 「力」が「支配する」という仕組みはわかるでしょう。絶対的に力のあるものが勝負に勝ちます。「力」は腕力（武力）あり、策謀あり、とにかく身につけた力の全てですので、まさに「実力」です。この言葉は5行あとにも使われています。

問3 社会の中に生きる我々一人一人のことですが、5字ちょうどで表している言葉は近くにはありません。ただ、根気よく探せば、最後から2行目の「社会の成員」が見つけられるはずです。

問4 ゲームを行うに当たって、各人が確認し、認めあっておかないといけない決まりがある、ということです。みんながその決まりを守らないと、ゲームそのものが成り立ちません。

問5 霸者が決まれば一旦「戦乱」がおさまるので、見た目に「平和な」状態になりますが、それは単に「霸者」の力の支配に他なりません。平和といっても、全ての民がのびのびと自由にいられる、真の平和ではないわけです。

問6 支配する者、支配される者、の言い換えです。「対比」ですから、探す言葉も対になっていないといけません。支配階級に立てるのはどんな者か、また支配されてしまうのはどんな者か、と考えて探すと、「強い者（強者）」（19・26行目）「弱い者」（19行目）の対に気づきますね。

問7 エ 「いざこざ」は「ちょっとした衝突・争い」という意味です。財産をめぐっていざこざがあろうがなかろうが、周囲の財産を狙って次々と縄張りを広げて行くのが人間だ、と書かれています。確かに、本文中の蒙古、アッシャリア、ペルシャ帝国などは、ただ自国の勢力の拡大のために周りを攻め滅ぼしていたと書かれ、ジャングルの中のトラにたとえられています。

問8 「近代以前の社会は……？」と書き出されているところは二ヶ所あります（5段落と7段落）。しかし、どういう「仕組み」だったかをはっきりまとめてあるのは、7段落の方です。傍線内の「全員で作ったルールによる対等なゲーム」と対照的な内容「強い者がルールを決め、全員が従う」に着目しましょう。

### 三

問2 A 「一生懸命」と同義の言葉です。B 少しとぼけた表情、様子を表す時によく使う表現です。C 「裏切らず」つまり、どんな時も必ずペットは待っていてくれる、その姿勢を表す言葉です。D 何かの現象・行動が急になくなつたようを表す言葉です。

問3 X 2行前にある「さびしい」がいちばんのヒントです。直前にも「家族のぬくもりを恋慕する」とあります。

Y 「一緒に（月子の）世話を」するために協力しあい、「けんかをしなくなった」のです。

問4 直後から3行後までに着目します。自分たちが買わなければ、その犬は殺されてしまう、それではあまりにかわいそう……というのがその犬を買った理由です。

問6 傍線をそのまま言い換えると、「家庭から家族がいなくなった」となりますが、別にずっといわけではなく、「（生活が）すれ違っている」ということですね。つまり、「家族がともに同じ時間を過ごせていない」ということなのです。

問9 「最も強く伝えたいこと」を探さなくてはなりません。すると、自身の変化について述べたところの中でも特に、「生命というものについて～もっとひかえめに生きなければ」（8ページの14～19行目）に着目できるでしょう。月子のような、か弱い、しかし愛しい命と生活をともにするようになって、地球上のありとあらゆる生命に思いをはせるようになったと述べています。そして、この地球上で人類だけが幅をきかせていてはいけない、と謙虚な気持ちになっています。